女優

女の海

瀬戸内晴美長編選集　第五巻

瀬戸内晴美長編選集　第五巻—女優・女の海
昭和四十九年四月二十日第一刷
著者—瀬戸内晴美　造本—杉浦康平＋海保透　発行者—野間省一
発行所—株式会社講談社　東京都文京区音羽二—十二—二十一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五—一一一一（大代表）　振替東京三九三〇
印刷所—豊国印刷株式会社・株式会社興陽社　製本所—黒柳製本株式会社
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。
©瀬戸内晴美　昭和四十九年　Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。　(文2)

瀬戸内晴美長編選集——第五巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

瀬戸内晴美長編選集　第五巻　目次

女優――5
女の海――229

女優

水の女

見張った目の中で、白い壁が波のようにうねりはじめた。壁は真白ではなく、緑がかった翳を持つ薄い灰色に塗りこめられていた。

揺れる壁にはどこからか光りが射しこみ、それが壁のうねりにつれきらきら水のようにきらめいた。

壁が広い大海原のように見えてくる。水平線も空もない無限の海が、どこまでも広がり、未来子は海にたった一つ浮ぶ小さな白い方舟になったような心細さに捉われてくる。

海は目の前だけでなく、やがて未来子の周囲にあふれてきた。軀が漂う。波にのみこまれる。目まいと恐怖で叫び声をあげたい。必死にその衝動に耐えて掌をからみあわせ、全身に力をこめる。乾いた目の中に縦横に虹がかかる。演技以外には、いつだって涙は浮べない眼だった。

揺れる海から光りが薄れ、虹の消えた後には、海よりももっと冷く、もっと荒涼とした無限の砂漠が広がっている。動物の足跡も、風紋の跡さえないのっぺらぼうの砂の海……永遠の黄昏……。腸がしぼりあげられるような淋しさに、未来子はついに身をもんで声をあげる。手負いの獣の鳴声のような哀切な悲鳴が咽喉をつきあげてくる。

その夢のあとでは、覚めると、いつでも全身はねっとりと汗に濡れていた。何もつけていない肌に、薄いナイロンのネグリジェが濡れ紙のように張りついている。汗は乳房の下と股の奥に最もおびただしい。

いつも見る夢——春日未来子がその夢を見る時は、心身が疲れきった時だ。

置時計は八時すぎをさしている。徹夜の撮影を終り、午前帰ってぐっすり今まで眠りこんでいたらしい。

ダブルベッドから白い素足をのばし、ふらっと立ち上った。闇が怖いのでひとり眠る時は灯りはつけておく。ライラック色の絹笠から弱い光りが滲み、部屋の半分をぼんやり照らしている。まだ越して二日目の部屋に馴染みが薄く、自分のいる位置がわかりかねるような頼りなさがある。

部屋の中央に立って自分の胸を抱き、未来子はあたりを見まわした。

一昨日、横浜の元町の家具屋から届いたばかりの家具が、それぞれの場所にしっくり収まって、未来子よりはるかにこの部屋にとけこんだ表情である。チーク材のどっしりした洋服箪笥も、ロココ風の揺椅子も、ロマンチックな金具で飾られた衣裳箱もどっしりしたサイドボードも、まだ杉晃が見たことのない品々だと思うと、早く京都の晃にそれらを見せたい気持がわき上ってくる。

横浜でロケのあった日の夕暮、晃にしゃれた部屋着でも

買っておくつもりで、舶来男物専門店のボビーへひとりで出かけていった。目的の品は丁度晃におあつらえむきのウールのチェックの粋なのが見つかり、ついでにイギリスのネクタイを三本ほど買って、家具屋の前を通りかかった。

何気なくのぞいた広い店に目をひかれる揺椅子をみつけたのがきっかけで、その店に入り、たちまち、必要な家具をすっかり買い整えてしまったのだ。

「お届け先はどちらへ」

お世辞の少い店の者が、映画スターの春日未来子を知らない筈はないだろうに、全く無関心に見えるのも小気味がよかった。未来子が前から元町での買物が気に入っているのは、外人相手のこの商店街では、店員までもそういう点では訓練されているのか、未来子のような者にも特別の目つきをしないことだった。

家具屋で住所を聞かれて、ハンドバッグの中の手帖をみなければ、とっさには町名も番地も出て来なかったおかしさを思いだす。

せりふを覚えることでは天才的で、一目台本に目を通せばたちまち頭の中に焼きついてしまい、相手役のせりふまでいっしょに覚えこんでしまうというので「リコピイ」というあだ名がついている。そのくせ、人の名前や、昨日買った物の値段などは一向に覚えない。まして越したばかりのじぶんの住所など、覚える気もないのだった。

この千駄ケ谷のマンションは、一ヵ月前、晃が上京した時、ふたりで決めたものだ。

東京のふたりの逢瀬の宿になっている赤坂の旅館「滝川」の女将が、まだ建築中の時から心がけておいて教えてくれたものだった。

「静かなのがいいな」

晃はこのマンションに来た時、すぐそういった。

「京都に三年もいたせいか、もうとても東京の汚さと騒々しさには神経がついていけないよ。でもこんなとこがポカッと町のど真中に残っているところもさすが、東京だね」

「もともと、晃は、江戸っ子なんだもの、来てしまえばすぐ馴れるわ。ね、もちろん、決心変らないんでしょ」

「変らないよ」

「そう、安心した。晃が時々何だか、ぼんやりして心細そうな顔するから心配になっちゃった。とにかく、今いくら、よさそうに見えたって、もう時代劇は凋落の一途をたどるだけなのよ。今のうちに晃も現代劇に転向しておく方が、絶対将来のためなんだから。それには何より東京に棲むことだわ。ね、迷わないでね」

「わかってるってば」

晃は、うるさそうに眉をしかめて、いった。未来子は、口まで出かかったもう一つのことばをのみこんだ。晃が本当にあの女と別れてくれたかどうか——けれどもそれは自分の口からはもう二度というまいと決心している。今ではもう、あの女との問題なんかどうだっていい気さえする。要するにふたりで堂々と棲むことが大切なのだ。噂よりな

により、悪びれない同棲の事実をつきつけることで、ジャーナリズムの好奇心をかえって手玉にとり、はぐらかせることにもなるのだ。

今夜、真夜中になったら、京都に電話しよう。家具の入ったことを晃にしらせてやろう。

未来子はそう思うと、ようやく心が晴れ晴れしてきて、胸が軽くなった。気がつくと、さっきの夢の中からずっと、胸に何かをつめこんだような重苦しい気分だったのだ。

シャワーを浴び、寝汗を流しおとすと、いっそう全身がすっきりして、眠気がなくなり目が冴えかえってしまった。

絨毯の上に湯上りタオルをひろげ、しめった全身にパウダーをはたきこむと、未来子は特別の注文で壁にはめこませた全身用の大鏡の前で、生れたままの姿で美容体操をはじめようと立ち上った。

ライラック色の灯の色に染まって、鏡の中は夜明けの湖水のように見える。その中に、真珠色に輝く未来子の裸身が一本の花茎のようにすっくりと立っていた。長い髪が背になびき、ゆるく左脚をひいただけの立姿に陰影を添えている。右手を自然に前にのばし、柔かな若草のあたりをかくそうとする、それはそのまま、ボッティチェリーの海の泡から生れたヴィーナスの立姿になっている。

日本人には珍しいバランスのとれた体型は、なめらかなで肩の上にすっくりのびた長い首筋にも、軀に比べるとたいそう小さな顔にも、ぴっちりとすき間もなく膝まで合わさった形のいい長い脚にもあらわれている。

何より目につくのは、四十九糎というウエストの細さの上に八十三糎の豊かなバストが支えられている危っかしさだった。乳房は自分の重さをつきあげるように上にむき、乳首は、乳房にとけこんで、突起はなく、ただふっくらと桃の花びらをはりつけたように紅を滲ませているだけであった。小刀で切りこんだ様な線が一筋短くついている。

恥しがりやでいつも姿をかくしているそれは、男の指と唇があたためる時、はじめておずおず首をのばすのだ。

胸の豊さに比べて腰廻りはそれより六糎細い。それだけの差で、いわゆるグラマーという脂っこい感じではなく、身長も百六十五糎あって、女としては決して小さい方ではないのに、たいそうきゃしゃな、嫋々とした印象を与える。骨細なので、どこにも骨ばったあとがなく蠟細工か、硝子の人形のような、痛々しいもろい感じがする。

「きかん気の女の子って感じのお尻だな」

晃がそこだけ熟しきらない堅さのこった引きしまった二つの丘をかくべつ愛して、冗談につねったり、叩いたりしたがるのが、未来子もまた一そう嬉しい愛撫だった。

着物を着ても洋服をまとっても、着やせがして、裸の未来子よりははるかに細っそりと見えるのも、実物よりはすべて大きく映るスクリーンの上では、大いに得をしていた。

未来子は自分の美しさが好きだった。

演劇界切っての美男美女といわれた両親の美の素質を、惜しみなく受けついだ軀に、自信と自負があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

晃は、はじめて未来子の軀の泉の近くに手を触れてきた時、ふっと指先の動きを止めた。
「ふふっ、何にさわった？」
「何だろう、これ」
「疱瘡のあとよ」
「ほうそう？」
「ええ、うちのおばあちゃまはね、厳しい人だったけど、あの時代の人にしては、とても進歩的な考えの人だったのよ。女の軀に醜いあとをのこす種痘は、一番目だたない内股にすべきだって、ここにしておいてくれたの」
「まさか、赤ん坊のきみを将来女優にするつもりじゃなかったんだろう」
「ええ、役者は大きらいなのよ。ただ、女の美しさを大切にした人だと思うわ、そのかわり、躾も日本的じゃなくて、とても変ってたわ。決して手をかけたり、どなったりされたことはないけど、おしおきは、応接間の壁に向って、一時間も坐らされるの。
小さな椅子を壁から三十糎ばかり離れた場所におき、さあ、未来、いらっしゃいって、とても静かな声でいうのよ。そのおしおきはそれは辛かったわ。何しろ、動き度いさかりの子供でしょう、十分もすると、もう目の前の壁がゆれはじめ、海になるのよ」
「その時の夢なんだね、未来が、とても情けない声をあげて呻く夢をみるのは」
「そうらしいわ……何だか淋しくってやりきれない気持……子供心にも、この世にはじめて生れた最初のたった一人の人間って、こんなふうに淋しかったんじゃないかと思ったわ」
未来子は晃といつかかわした会話を思いだしながら鏡の中に思いきり両脚を広げた。そうしながらするすると身を沈ませていくと、それもまた祖母の絹の注意で、幼女時代からほとんど膝を曲げて坐らされたことのない脚は、膝頭の隆起もなく、アスパラガスのように、つるっとして、真直ぐ一文字に左右にのびていく。
毛脚の長い絨毯の感触が、一番柔かな未来子の軀の入口に触れるまで、脚をのばしきると、未来子は両手を大きく背からまわし、左の脚の爪先まで、上体を倒してゆく。左から右へ、右から左へ、軀は未来子の意志の通り、どこへでも草のようになびいた。未来子を抱いた晃が、水のような女だとつぶやいた柔軟さだった。
十分も体操をすると、また全身にうっすらと汗が滲んできた。未来子の汗は花よりも肉の厚い果実に近い匂いがした。
もう一度シャワーを浴び、ようやく未来子はもとのベッドにもどった。
付人の少女は、今夜は世田谷の未来子の洋服のデザイナーの家へ、使いに行っていない。このマンションに移ってから、近所の下宿に一部屋付人用の部屋を借り、そこに寝かせることにしてある。晃との愛の生活を誰にもわずらわされず、徹底的に享楽したいという下心があっての用意

だった。
自分で水やコップの支度をして、未来子はベッドの上でブランデーをのみはじめた。
テレビのチャンネルを手当り次第まわしていると、不意に画面に、母の顔が大写しになって浮び出た。
歌舞伎座からの中継で、楊貴妃の舞台だった。傾国の美女に扮した鳳しのぶは、誰にも真似ることの出来ない妖艶なながし目で、舞台中央の階段から見得をきり、欄干下の高力士を見下している所であった。
ポッティチェリーの女の顔をそのまま持ってきたような瓜実顔の鳳しのぶは、もう二十数年も舞台女優としての王座を保ちつづけている大女優の風格が、指の先、髪の一筋にも滲みでていた。
小さなテレビのブラウン管では、しのぶの風格がはみだしそうな迫力があった。
気味の悪いほど声が未来子に酷似していた。未来子よりすべてが一まわり大柄なのが、舞台では引立ち、しのぶが出ただけで、舞台の灯がさっと一きわ明るさをますような輝きをそえた。
高く結いあげた髷に花簪をさし、ゆたかな胸に瓔珞を垂らし、襞の多い羅衣の裾を階いっぱいにひいてすっくりと立った楊貴妃は、額に描いた花紋も、眦にさした紅のあとも鮮かに、絶世の美女の気品と香気に匂いたち、階の欄干を飾って今を盛りと咲き誇った牡丹の花群のそのすべての華麗さよりもなおいっそう華やかに匂いたっている。
未来子は思わず、ブランデーグラスが両掌にもみしだかれるかと思うほど掌に力をこめていた。
誘惑の意志をこめて、高力士を見下す楊貴妃のこの世ならぬ美しさに、一瞬、恍惚とすべてを忘れ魂を奪われたことに気づいたからだった。
「本当の役者というものはねえ未来、せりふ廻しがうまいとか、所作がいいとかいうものじゃないんだよ。舞台にその役者がたつと、ぱっと、舞台の灯がきらめきを増す。そしてお客は、この世を忘れ、われを忘れて、ある一瞬、役者の美しさに、うっとりと浄土を見る。そんな瞬間をお客に与えることの出来ない者は役者なんて口はばったいことは云えやしないやね」
いつかしのぶが、未来子にいったのを思いだした。およそ、論理的な考え方や理屈が苦手なしのぶは、座談会というのが大きらいだったし、実の娘の未来子にむかってさえ、芸談めいたことはほとんどしたことがない。そんなしのぶのついもらしたことばだけに、それは、未来子の心に焼きついていて、消えることがなかった。
テレビという、こんなせまい画面の、白黒の不鮮明な映像の中でさえ、これほど、人を恍惚と酔わせる鳳しのぶの芸というものは、何なのだろう。
未来子は、身内からふきあげてくる熱い湯のような想いをじっと見つめていた。
母というより、一人の女優としての鳳しのぶに対し、全

身がふるえるような憧憬と感動を覚える。それはただちに、嫉けつくような息苦しい嫉妬につながっているのも感じないわけにはいかない。

爛漫の牡丹の奢りと誇りにみちみちた楊貴妃の蠱惑は、鳳しのぶという女優そのものの生得の妖しい魅力でもあった。

――まだ敵わない――

正直に未来子は自分につぶやいた。

生後一年にもならない自分を捨て、父を捨てて走った母が、その後どれほど多くの男のいのちを吸いつくし、ここまで自分を華ひらかせて来たか、未来子も人の噂や、書き伝えられたものでおおよその見当はついている。

三年前、物心ついてはじめて二十年ぶりに母と娘が出逢った時も、しのぶは、当時の愛人だった若い演出家の田辺と並んでいて、

「まあ、これが未来子？　ナベちゃん、見て！　あたしの若い頃そっくりよ。あたしの二十の頃はこの子そっくりだったわ、その時あんたに逢っていてあげたかったわねえ」

といいながら、切れ長な大きな目を、みるみる涙であふれさせ、童女のように手放しで涙をほとばしらせたものだ。

あれからだって、しのぶの男はもう二人変っている。それにしてもこの瑞々しさ……男との情事がしのぶの場合は、何一つ、傷あとや、疲労のあととしてはのこらず、すべて、しのぶという女優の稀有な才能を開花させる肥料になっているのが目ざましかった。

――あたしはママとちがうんだから――

未来子は、あたたまったブランデーをぐっと白い咽喉をそらせてあおった。

熱い酒が炎になって胸にしみわたってゆくと、晃を思う時とはちがう、もっと切実な、身をしぼるような何者へともしれない憧れが細胞をふくらませてくる。

「ママは女としてもすばらしい女だったよ。女優としてはもっとすばらしい。ただ、妻とか母とかの役目が似合わない女だったのだ。パパは、役者としては完全にママにくわれてしまった。要するに負け犬さ。

芸術家夫婦の家で、どちらか一方が負け犬になった場合、負け犬は姿をかくすより生きる方法がないのだ。未来、お前にはそのうちわかって来るだろう。お前は私の血と同じくらいママの女優鳳しのぶの血も受けているのだから」

東洋のヴァレンチノとうたわれた華やかなある季節も持ったことのある父の春日直人が、度々くりかえしたことばが思いだされてくる。

直人は、こういう話を、まだおかっぱで、物の分別もつきかねるような幼女の未来子を膝にかかえこみ、その小さな頭を撫でながら、ひとりごとのように、低い声でくりかえし云いきかせたものだった。

ことばの意味は、理解することもないまま母の子守唄というものに記憶のない未来子は、父のひくい声を、一つの

歌のように、心の暗い襞の中に縫いつけてしまった。
ブラウン管の中から、突然、しのぶの奢りきった華やかな笑い声がひびきわたった。またしてもその笑顔の大写し……思いきり開かれた唇の中にカメラの鋭い目が当っている。
未来子は、うっと息をのみ、思わず身をのりだしていた。画面いっぱいになったしのぶの口の中で、肉の厚い濡れた舌が、いきいきと演技している。
笑い声の高さと抑揚につれ、笑い声にこもる楊貴妃の計算と官能のさざめきを、一枚の舌が、微妙に波うちうごめきながら、しのぶの意志のままに繊細的確に表わしていた。
まだつづく笑い声を追いかけるように、サイドテーブルの電話が気忙しく鳴りだした。

満ち潮

電話は東都映画の助監督前川からのものだった。
明日八時から入る筈になっていた撮影が、未来子の相手役の広田貢一がさっき交通事故で全治五日ほどのけがをしたため、未来子の出場は延期になったというしらせだった。
「危いわね、酔っぱらってたの」
「まあ、そのあたりでしょうねえ。何しろ、あのスピード狂だから今までやらないのが不思議だったんですよ」
「顔じゃないの」
「肩と胸らしいですよ。でも一週間とかからないんだから大したことないです」
つい最近、海の向うではジェームス・ディーンが自動車事故で思いがけない夭逝をとげたばかりの時なので、撮影所では異様なほど車に対して神経質になっている。
二日おいて、未来子だけの場面に入るからとりあえず明日、明後日は休みにしようというのが前川の要件だった。
未来子は思いがけず恵まれた二日の休みをすぐ杉晃に結びつけて考えた。
時計は十時をまわったばかりだった。今からなら、真夜中の飛行機に間にあいそうだった。そう決心するとすぐベッドをとびおり、ネグリジェをぬぎすてた。
洋服箪笥の中から晃の好きな白いスーツをとりだすとす早く身にまとった。付人の正子あて走り書きのメモをのこし、電話の下にはさんでおく。化粧を落している顔に、クリームパフを叩きつけ、唇だけかっきりと描きこむと、頭からネッカチーフをかけた。

支度はそれだけだった。呼びつけのハイヤーが来るまでに、クールを一本ゆっくり吸った。

伊丹から深夜の道を走りつづけた車が京都に入った時はもう二時をまわっていた。貝殻のように戸をとざした旧い家並が黒々とつづくむこうに、東山がなだらかな背をのばしていた。柳の葉のような弦月がかかり、星が無数にきらめいていた。

東京に比べて空気の澄んだ京都では、星のきらめきがちがう。空気まで練絹のようなこまやかさで、皮膚にも肺にもあたりがやさしかった。

晃の好きな京都を、未来子は全身で吸いこむように深い呼吸をした。車が鴨川ぞいの道を上流に向って走りつづける。このあたりの川原は橘左近次とよく歩いたところだった。左近次の黒目の大きな吸いこむような目を久しぶりでなまなましく思いだした。

「下鴨のどこでっしゃろ」

運転手がいった。

「中川原町」

「へえ」

鴨川を渡り車が道幅のせまい邸町に入っていくと、未来子は上体をのりだすようにして運転手に道を教えた。

そのあたりで目立って大きい邸の裏門の前で車を帰した。勝手口とは別に、杉晃のために新しく作った出入口だった。鍵は晃と未来子が持っていた。

晃の離れは灯の色がなく闇に包みこまれていた。深い庭木をへだてて母屋の二階屋が闇に濃い影をこもらせている。二階の窓に灯が滲んでいるのは大家の三男が受験勉強をしているものだ。

勝手知った庭石を踏み、未来子は晃の離れに近づき、手許の狂いもなくすぐ鍵穴をみつけた。

外気より、もっと冷え冷えと感じる堅い空気が戸をあけたとたん真向からあふれてきた。二、三日誰もこの家に夜を眠っていないことを堅い冷い空気が語っていた。

未来子は片っぱしから家中の灯をつけて歩いた。十七坪ほどの家の中は、どこもみな整然と片づいていた。

まだ棲みなれない千駄ケ谷のマンションより、ここの方が未来子にはずっと肌馴れた安心感が湧く。テーブルセンター一枚、灰皿ひとつにも未来子の情緒がしみついていた。

そこだけ洋間の寝室へ入ると、未来子はガスストーブの火をつけた。

ベッド脇のサイドテーブルに未来子の笑っている写真がたててあった。大きな前歯が二本、上唇からこぼれて、笑うと急にあどけなくなる未来子の顔だった。

素顔だと冷いほど整いすぎた未来子の顔の中で、この二本の前歯だけが、おどけていて、アンバランスなアクセントをつくっている。つまんだようなとがった顎とこの前歯が可愛いと晃にいわれ、未来子はあやうく入歯にかえるつもりだったのを思い止ったものだ。

スーツをぬぎ、晃の洋服箪笥の中から自分のネグリジェ

をひきだして着かえ、ブランデーグラスを両掌ではさみこみ、ベッドに坐ると、羽田から飛んで来た時間がかき消え、千駄ケ谷の自分の部屋に今が直接つながっているような錯覚を呼ぶ。

この部屋は、晃と未来子のふたりだけのもので、誰をも入室させていない。

晃があの女との関係を絶ち、未来子との愛の絆をいっそう深めるための第一手段として、ふたりで見つけた愛の巣だった。

はじめてこの部屋で夜をすごした時、晃は未来子の耳もとで囁いた。

「ようやく安心した。未来のあの声は、とても高いんだもの、ここじゃもうどこにも聞えない」

この部屋に移ってからの晃の愛撫には、何か枠が外されたような大胆さと情熱が加わった。

暗黙のうちに、ふたりはふたりの過去に触れあわない了解をなりたたせていた。

十八の年、結婚し、夫の手で映画界に入れられ、二十で夫から逃げだして二十三の今になるまで、春日未来子の恋の相手として噂に上った男は一人や二人ではなかった。

いかにももろそうな痛々しい軀つきと、静止すれば冷いくせに、動けば、花が崩れる瞬間のようなコケティッシュな匂いがわきたつその表情と、甘い囁くような声……。そんな印象もふくめ、春日未来子は、実母の鳳しのぶの悪びれない大っぴらな男遍歴の歴史と一つにして、やはり母子の血は争われない男喰いなどと陰口されていた。

けれども、実際には未来子と深い仲になっていたのは、橘左近次だけだったのだ。

終戦後の映画界が、進駐軍の政策で、いわゆるチャンバラものを封じられた後、すっかり衰えきった時代劇の息吹を見事にふきかえらせたのは、全く新しい時代劇スターづくりのたまものだった。

各映画会社ではこぞって歌舞伎畑の中から、まだ芽の出ない若い美青年を次々スカウトして来た。

梨園でも名門の子弟もいれば、名優の養子という形で一応かっこうをつけた若者もあった。彼等は踊りの下地があるおかげで、殺陣の型でとにかく腰が決ったし、ツラが似合った。筋が単純で、大して演技力もいらない娯楽映画では、美男でさえあれば一応ミーハー族をうならせることが出来た。

時代劇が専門の京洛映画でも的場銀四郎とか橘左近次とか、藤川大蔵とか、若手スターが続出し、それぞれの持味で成功をおさめていた。

新人発掘とスター作りでは奇蹟のようにうまいのに、スターを育てることが不思議に下手な京洛映画は、たいていい物にしたスターを次々他社に引き抜かれてしまう。

的場銀四郎と橘左近次が大東映画に、つづいて藤川大蔵が朝日映画に引きぬかれた時は、京洛映画の歴史も伝統も、ついにここで潰れ去るかと危ぶまれた。

その危機を救って、電撃的な登場をしたのが杉晃だっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com